

増シヤシヤブ、シヤシヤビ等ノ名ハ、木半夏ノ名ヲ誤リ混ジタルナリ、  
 【古今要覽稿 草木】ぐみ もろなり 胡頹子

ぐみもろなり、漢名胡頹子は、冬も葉凋まず、十二月花を開く、又九月末より十月に至りて開くも  
 あり種類多き故遅速あり、花の形状は筒子のごとくにして、四瓣白色、下に向ひて開く、早くひら  
 きたるは敢て實の形を成すあり、其熟するは苗代の比なり、夫木集に、小山田のなはしろぐみの  
 春すぎたと詠じたるには、糖字を用ひ、本草和名には櫻桃一名朱櫻、胡頹子と見ゆ、佐藤成裕曰、古  
 の櫻桃はゆすらにあらず、櫻桃の一名に含桃の名あり、この含桃は胡頹子なり、鶯所含食といへ  
 るはぐみにあらざれば、含食とはいひ難し、櫻桃は大にして含食すべからず、本草和名に櫻桃一  
 名胡頹子となす、故あれども未だ證とすべき書を得ず、尤胡頹子釋名に、陶弘景の注に、山茶莢及  
 櫻桃皆言似胡頹子、凌冬不凋と見ゆれども、證となし難し、また救荒本草所載の野櫻桃はぐみな  
 りと、蘭山の説なり、尤この野櫻桃は夏ぐみにて、胡頹子集解にいふ木半夏なりといへり、それは  
 葉細く薄くして、季秋には落す、ぐみの種類本草綱目啓蒙に詳なれば、こゝに載せず、又山茶莢本  
 草和名和本草にいたちはじかみ、一名かりはのみとみえたれども、今和漢通名にして、山茶莢  
 といへり、此花早春より開きて、梅と共に稱すれば、是又櫻桃に列すべし、又其實を形様するに、胡  
 頹子は山茶莢に似たりといひ、山茶莢は胡頹子に似たりといへり、又古より茶莢をぐみといひ  
 て、九月九日用ゆるも、茶莢袋といへり、この木、享保年中に漢種渡り、今世に多く栽ゆといへるは、  
 漢種なれども、元より皇國自生もありし故なり、

〔佐渡志<sup>五</sup>物産〕胡頹子 方言グミ

品類甚多シ、ナワシログミアリ、サワグミアリ、カハラグミアリ、秋グミハ食用ニサワリナシ、  
 〔夫木和歌抄<sup>二十九</sup>〕

民部卿爲家